

## 「わたし」とは何か —— B.ロナーガンの内面の学問より ——

■ 序論	2
■ 第一部 認識者としての「わたし」	
1-1 内面の解剖学	3
1-2 第一の感覚的次元と第二の知的次元	4
1-2-1 内面と意識	6
1-2-2 内面と次元	7
1-2-3 内面分析と自己同化	7
1-3 第三の理性的次元	8
1-3-1 確実な判断	10
1-3-2 蓋然的な判断	12
1-3-3 自己肯定と自己認識	13
■ 第二部 実行者としての「わたし」	
2-1 第四の実存的次元	16
2-1-1 実存的次元とサイキ	16
2-1-2 自己超越	18
2-1-3 実存的次元と愛	19
2-2 第五の宗教的次元	19
2-2-1 究極的な実在に関する問い	20
2-2-2 制約のない愛	21
■ 第三部 心について	
3-1 心とは何か	25
3-1-1 止揚	26
3-1-2 三位一体と心	28
■ むすび 心における諸宗教との対話	30

2009年12月12日

上智大学神学部4年新美京子

## ■ 序論

だれも自分で望んでこの世に生まれてきた人はいない。わたしたちはみな、気がついてみたら、「わたし」という存在としてこの世に生を受けていた。では、この「わたし」とは、いったい何なのだろうか。わたしは人間であると言うなら、「人間」とは、いったい何なのだろうか。これは、一言で答えるにはあまりにも大きすぎる問いかもしれない。と言うのも、この問いは、いわば人類のテーマ・ソングのようなもので、一人ひとりの人間が生まれたときから暗黙のうちに背負いこんでいる「宿題」のようなものだからである。人類はこの問いの答えを、歴史を通じて模索しつづけてきたと言えるだろう。古代から現代に至るあらゆる学問・芸術・文化における進歩・発展は、そうした模索と密接に関係している。医学はそのよい例である。解剖学の発達によって人体にメスが入り、人体構造が明らかになった。そこで明るみにだされた種々のデータ——心臓、肺、胃、肝臓、腎臓、腸など——について研究がなされることで、医学は今尚、進歩しつづけている。

では、改めて、「わたし」とは何なのだろうか。この物質的な体は確かに「わたし」の一部だが、物質的な体だけが「わたし」なのではない。したがって、解剖学はその質問に十分に答えているとは言えない。この体には目と耳と鼻と口と皮膚がある。それで、空の青さ、鳥のさえずり、薔薇の香り、杏の酸味、風の爽やかさを感じることができる。しかし、それだけではない。喜んだり、悲しんだり、腹を立てたりする。質問したり、考えたり、賛成したり、決心したりする働きもまた「わたし」のなかに行き交うことを、それぞれが体験している。波間に漂う小舟が帆を張って方角を定めるように、わたしたちはさまざまの感じや感情に曝<sup>さら</sup>されながらも、日々、思索し、行動しているのである。

そのようななかで、自分が何を感じているか、何を考えているかを正確に表現できないことは多い。突然、涙が出てきたり、ことばに詰まったりする。思っていたのと正反対のことをしてしまい、自分で自分のことを訝しがることがある。意味不明の夢を見て怯えることもある。わたしたちが体験しているかぎり、わたしたちの内面は、さまざまの内面的な働きが気まぐれに起こっては消えていく不可知領域、「ブラック・ボックス」のようなものかも知れない。インドの説話に次のようなはなしがあるという。

ある旅人が空き家で一夜をあかしていると、一匹の鬼が死骸をかついでそこへやってくる。そこへもう一匹の鬼がきて、死骸のとりあいになるが、いったいどちらのものなのかを聞いてみよう、旅人に尋ねかける。旅人は恐ろしかったが仕方なく、まへの鬼がかついできたと言うと、あとの鬼が怒って旅人の手を引きぬいて床に投げつけた。まへの鬼は同情して死骸の手をもってきて代わりにつけてくれた。あとの鬼は怒って足をぬくと、またまへの鬼が死骸の足をくっつける。このようにして旅人と死骸の体とがすっかり入れ代ってしまった。二匹の鬼はそこで争いをやめて、死骸を半分ずつ食

って出て行ってしまった。驚いたのは旅人である。今ここに生きている自分は、いったいほんとうの自分であろうかと考えだすと、わけがわからなくなってしまうのである<sup>1</sup>。

このはなしは「わたし」ということの不可解さを言い表していると言われているが、この不可解な「わたし」というものにも、物質的な体に構造があるように、何らかの構造があるのだろうか。何らかの動的秩序があるのだろうか。神が人間を造られたというなら、神はわたしたちの内面と、どのように関わっておられるのだろうか。このような大きな問いに答えられるわけはなく、そもそも、そういう問いに駆られて人類は探求し、多くの学問が発達し、種々の学説・見解が生まれてきた。いわば人体が解剖されているように、人間の内面の構造を明らかにしようとしたバーナード・ロナーガン(Bernard Lonergan)の「内面の解剖・分析学」は、これまでの学説を一步進めて、総合的に心の問題を明らかにしようと試みている。

本稿は、B. ロナーガンの思想をもとにして、自分自身の内面の構造を知るという内面探求の旅に乗りだし、「わたしとは何か」という根本的な問いに、一つの答えを与えようとするものである。

## ■ 第一部 認識者としての「わたし」

### 1-1 内面の解剖学

早速、人間の内面を解剖することにする。だが、人間の内面を解剖すると言っても、あまりに漠然としていている。第一、ふつう「解剖する」と言うなら、解剖しようとしているものがあるはずである。ないものを解剖するわけにはいかない。わたしたちの場合は、「人間の内面」を解剖しようとしている。したがって、この「人間の内面」というものがなければ、はなしにならない。そこで、一つのクイズを出すことにする。実は、このクイズを解くことで、これから解剖しようとしているものを、実際に準備することになるのである。

獵師が小屋を出て南に10キロメートル歩いた。それから向きを変えて西に10キロメートル歩いた。それからさらに向きを変えて北に10キロメートル歩いたら、自分の小屋にもどったという。むろん、小屋の位置は最初から変わっていない。こんな妙なことがあり得るだろうか<sup>2</sup>。

ヒントは、地球上にそんな妙なことが起こる場所があるということである。それはどこだろうか。答えは「北極点」である。北極点に小屋があれば、南に10キロ、西に10キロ、北に10キロ歩くともとの場所にもどる。この答えに自力で到達した人も、説明されてようやく納得できた人も、このクイズの答えを理解したと言える。

さて、なぜこのようなクイズを出したのかと言えば、解剖しようとしているものを準備するためであった。このクイズに答えのおかげで、これから解剖しようとしている内面のデータが準備されたことになる。それは、わたしたち一人ひとりがこのクイズの答えをとらえた「理解」という働きである。クイズに頭を悩ませているうちに、あるいは、降参して答えを聞いたときに、わたしたちのうちに「わかった」という火花のような閃きの瞬間があった。まずは、この理解・閃きという内面の働きを対象としてとらえ、その働きにメスを入れてみることにする。メスを入れるとは、理解という働きについて「理解とはいかなる働きか」という問いを出すことに相当する。この問いに答えていくことで人間の内面に順序よくメスが入り進み、内面の構造の全容が明らかになるのである。

## 1-2 第一の感覚的次元と第二の知的次元

「理解とはいかなる働きか」。この問いに答えるために、「北極点」という答えに至ったプロセスをふりかえってみる。まず、クイズと聞いて、わたしたちは内心身構えながらも興味を覚え、のどが渴いていたことも忘れて、その内容にぐんぐん引き込まれていった。登場する猟師、小屋、猟師の姿などを思い浮かべた。たとえば、細長い銃を担いで黙々と歩いている猟師の姿、古ぼけた丸太小屋の輪郭などである。このように想像することができるものはみな、色、形、大きさなどの感覚によってとらえられる内容から成っている。感覚によってとらえられる内容から成るものを、感覚的なデータとよぶ。

結局のところ、クイズは「このような奇妙なことは起こり得るか」という問いでしめくられる。そのときすでに、問いに興味を覚え、考え始めていた。このように物事の原因・理由について「何か」、「なぜか」と質問したり答えたりするのは、知りたいという欲求に貫かれている知性のおかげである。知性は、働きかける対象である感覚的なデータなしには、自らの能力を発揮することができない。感覚的なデータについて問い、その問いに興味を覚えるとき、データを手がかりに考え始める。何のために考えるのかと言えば、理解するためである。

考えている最中に行われるのは、イメージの特定作業である。関連性があると思われるイメージが想像力によって描きだされる。知性と想像力はイメージを並べたり、くみ合わせたり、回転させたり、裏返したり、切り取ったり、つけ足したりしながら、問われている内容を一つにまとめあげることのできる適切なイメージが得られるまで、試行錯誤を重ねる。ちょうど、植木をハサミで刈りこんでいくように、知性はイメージに働き

かける。要するに、この作業全体は、理解しようとする知性と、イメージを作り出す想像力のダイナミズムによって方向づけられているのである。

適切なイメージが浮かんでくれば、遅かれ早かれ、「あ、わかった」という理解・閃きの瞬間が訪れる。反対に、思い描いているイメージが適切でないかぎり、問いの答えは得られない。先ほどのクイズでは、南、西、北の順に歩く猟師の軌跡が四角形のイメージであるかぎり、いつまでたっても北極点という答えには到達できない。行き詰まりそうになったとき、ヒントが与えられた。「地球上にそのような場所がある」と。ヒントの役割は、イメージを修正していく作業をうながすことである。四角形のイメージが修正され、三角形の頂点が北極点と重なり合うイメージが得られたとき、地球上のある場所と、小屋との関係をとらえる理解の働きが起こり、クイズの謎が解けた。

ここで、理解の働きが問いの答えに相当する内容・理解可能な関係 (intelligibility)をとらえることに注意したい。理解可能な関係が感覚的な要素を踏み台として把握される段階で、感覚的な要素のほうは捨象され、次第にそぎ落とされてしまう。理解した内容は内的にも外的にも表現化される勢いをもっている。「理解した」と言いながら、その理解に内容がない場合には、結局のところ、何も理解できていない。理解していても、うまくことばにできず、もどかしい思いをすることもある。それは、自分ではよく理解したと信じていても、何らかの曖昧さが残っているために、内的なことば・概念を形成し損ねているか、あるいは、理解した内容が内的に言語化されていても、それを外的に表現化する段階で、何らかの不具合が生じているかのどちらかであると考えられる。理解の内容が内的に整序されていれば、いつでも外的に表現化できる状態にある。クイズの例で言えば、「北極点」という内的なことばは、外的なことばとして「北極点」であると表現化された。外的なことばや概念のほうから言えば、ことばや概念の意味はことごとく、人間の知性が起こす理解の働きに由来していることがわかる。

ここでクイズを解くまでにたどった内的プロセスをまとめておく。感覚的なデータについて問いが出されると、データを手がかりに考えながら、あれこれとイメージを思い描いた。ヒントに助けられて適切なイメージが得られると、クイズの答えが閃き、その内的な勢いによって、理解した内容が内的なことば・概念となり、他者に伝達するために外的なことばとして表現化された。

これで「理解とはいかなる働きか」という問いに答えることができる。この問いには、理解に先立つさまざまな働きと、それにつづくさまざまな働きとの諸関係をとらえることによって答えなければならない。すなわち、理解とは、「感覚的なデータについて質問し、考え、適切なイメージが得られたときに起こる働きであり、得られた理解の内容はまず、内的に表現化され、次に、外的に表現化されるものである」と。このように、理解という働きと感覚的なデータとの関係、理解という働きと問いとの関係、理解という働きと考えるプロセスとの関係、理解という働きと適切なイメージとの関係、理解とい

う働きと内的なことば・概念との関係、そして理解という働きと外的なことばとの関係をとらえたときに初めて、理解とはいかなる働きかを理解したと言える。

「理解とはいかなる働きか」という問いに答えたことで、「わたし」という人間の内面の初めの二つの次元を明るみに出すことができた。第一は、五感によって感覚的なデータをとらえる感覚的次元、そして第二は、感覚的なデータについての問いによって開かれる知的次元である。

### 1-2-1 内面と意識

ここで、内面と意識の関係を明らかにしておく。内面に生じる働きには、本人がその働きに注意しているかどうかとは関係なしに、「そのように働いている」という感知(awareness)がともなう働きと、そうした感知のともなわない働きがある。前者のように感知のともなう働きの性質を意識(consciousness)とよび、後者のように感知のともなわない働きの性質を無意識(unconsciousness)とよぶ。たとえば、見る、聞く、触れる、味わう、嗅ぐという五感の働きはみな、感知がともなう働きに属している。のどが渴いていることをすっかり忘れてクイズに夢中になっていたとしても、のどの渴きという働きは、元来、感知のともなう意識的な働きである。したがって、クイズを解いてしまえば、早晚、渴きが蘇ってくるだろう。また、好奇心に駆られて質問したり、考えたりする知性の働きも、そのように質問したり考えたりしているという感知がともなう意識的な働きである。このように感知されるものとしての人間の内面全体は、経験される領域であり、意識の構造であると言える。一方、たとえば、爪や髪が伸びたり、血液が循環したりする働きは、本人がいくら注意しても、感じるができない。これらの働きは、元来、感知のともなわない無意識に属しており、経験されることがない<sup>3</sup>。

また、意識は二つの要素から成っている。一つは、知りたいという欲求のダイナミズムである志向性(intentionality)であり、もう一つは、志向性以外のあらゆる働きを指すサイキ(psyche)である。「神経の無意識的な働きは、意識的なものに統合されることによって、サイキの流れに入る」<sup>4</sup>。サイキに属する働きとしては、「感性的な意識の流れ、すなわち、感覚や感情、記憶、イメージ、情緒、衝動、それらの互いの関係、身体的働き、人に対する自発的反応、目に見えない心理的な働きのなかに漠然と秘められているすべての感性的な傾向など」<sup>5</sup>がある。

このように、「わたし」の内面には、志向性とサイキの働く意識的な領域と、無意識的な領域が開かれていることがわかる。換言すると、「わたし」の内面は、「志向性、サイキ、および神経の無意識的な働きによって維持された体(有機体)から成るのである」<sup>6</sup>。

### 1-2-2 内面と次元

次元とは、一定の意味領域を表しており、一つ次元が上がるごとに新たな意味がつけ加わっていくものである。たとえば、数学の世界では、「長さ」という一次元の単位が掛け合わされて「面積」という二次元の単位が生じ、一次元と二次元の単位が掛け合わされて「体積」という三次元の単位になる。このように、新たな意味がまえの意味につけ加わってより高次の意味領域が生じていく次元のイメージを、人間の内面の構造と重ねて考えることは有意義である。人間の内面の構造は、知りたいという欲求のダイナミズムにしたがって、まえの段階が次の段階を準備しつつ、高次の段階へと統合されていくという特徴を有しているからである<sup>7</sup>。

意識の初めの二つの次元を例にとりて説明しよう。第一の感覚的次元にある意識として、目覚めたばかりの状態をあげることができる。「今は何時か」、「今日は何をすることになっているか」などの問いが浮かんでくるまえの数秒間、壁の白さをぼんやりと見たり、毛布の温もりを心地よく感じたり、かすかな音を耳にしたりしながら、ただ横たわっている状態がある。また、日中、激しいスポーツをした後で夢中になって水を飲み、渇きが癒されていく快感に身をまかせている状態も、意識の第一の段階に属している。このように、意識の感覚的次元とは、動物と同様の本能的行動パターンに支配されている状態のことであり、思考の働く余地は、表面的にはないと言えるのである。

この第一の意識の状態は、知りたいという欲求が働きかける段階に移行していく。これが第二の知的次元である。先の例では、ベッドのなかで聞こえてくる音について、「あの音は何だろう」と暗黙のうちに問い、「新聞配達バイクの音だろう」と思ったり、ベッドから起きだして、天気予報をチェックしたり、大学の講義のなかでさまざまな疑問を抱いたり理解したりする。スポーツの後で心ゆくまで水を飲んだら、今度は、帰りのバスの時刻を知りたい。このような第二の知的次元が、感覚的なデータから出発してどのようなプロセスをたどるものであるかは、すでに述べたとおりである。

### 1-2-3 内面分析と自己同化

これまで、「わたしとは何か」という問いに答えるために、「解剖」という比喩を用いて人間の内面にとりくんできた。このようなとりくみは内面分析 (Introspective Analysis) とよばれる。換言すると、人間の内面を解剖するとは、人間の内面を対象としてとりあつかい、客観化することである。初めにクイズが出され、「猟師」や「小屋」などの感覚的なデータの関係をとらえたことで、「北極点」という答えが客観化された。

今度はそこから一歩進んで、クイズを解いた「理解」という意識のデータについて、「理解とはいかなる働きか」と問うことで、意識の構造が分析の対象となり、その二つの次元——感覚的次元と知的次元——が客観化された。要するに、「わたしとは何か」という問いは、人間の内面の意識のデータについての問いであり、内面分析は、その問いに正しく答えることで、「わたし」という人間の内面の領域全体を客観化することを目指しているのである。

このように自分の内面に精通することで、自分の理知的意識を自分のものにすることを、自己同化(self-appropriation)とよぶ。人間の意識はすべての人のうちに見いだされるものとして普遍的であると同時に、一人ひとりが自分のうちに見いだすことができるものとしてことごとく具体的なものである。それゆえ、「人は自分自身で、自分自身のうちに、自分自身の意識的、志向的な種々の働きとは何であるか、そしてそれらがどのように関連し合っているのかについて発見することができる。そして、自分自身で、自分自身のうちに、なぜこれこれの働きがしかじかの方法で行われることが人間の認識を構成するのかを、発見することができる」<sup>8</sup>のである。

自己同化はすぐに終了するのではなく、生涯にわたって行われていくものであるという意味で、相対的なプロセスである。自己同化に磨きをかけるためには、刻一刻と自分の内面に生じては消えていく内的働きに注意を払い、それらについて「実況中継」を試みることから始めるとよい。今どんな気分か、何を気にしているか、どんなイメージが頭をよぎっているか、何を理解したか、これから何をしようと思っているか、などの具体的な内容から始まり、内的な働き自体の分析にまで及ぶ。普段、内的な働きの内容を具体的に表現化していても、その働き自体について分析することはない。音楽を聴いているとき、流れてくる音に注意を払っていても、自分の顔の横についている耳の存在には無頓着であろう。クイズを解くことはできても、クイズを解いた「理解」という働きがどういう働きであるかを考えたことはなかったはずだ。感覚、イメージ、質問、理解、内的な表現化、外的な表現化がそれぞれことなる働きであり、かつ、互いに関係していることを把握したうえで、さまざまな具体例を使って分析してみる必要がある。このようにして自分の意識に精通するとき、一見、ばらばらのように思われる内面的な働きが、見事に統合されていることをとらえることができる。その意味で、自己同化は「わたし」という人間の内面に統合をもたらすと言えるのである<sup>9</sup>。

### 1-3 第三の理性的次元

第二の知的次元は、感覚的なデータについて「何か」、「なぜか」と問い、理解に到達することによってひとまず完結する。ところが、「わたし」の内面はそれで終わりではない。知りたいという欲求は、自らが構成している内面の次元を、問いを発すること



によって引き上げていくダイナミズムである。理解していても、正しく理解していないなら、厳密な意味で物事を「知っている」、「認識している」とは言えない。早とちりや、思いこみの可能性がある。

理解と正しい理解のちがいを区別する例として、「伝言ゲーム」をあげることができる。これは、ことばを用いずに、情報をいかに早く正確に理解して伝えることができるかを競うゲームである。たとえば、初めに与えられた「りんご」という情報は、ジェスチャーで人から人へと伝えられていくうちに誤解され、「トマト」ということなる情報になってしまう。合理性にともなう方向づけられていたサイキは、「りんご」が「トマト」になってしまうという意外性を体験し、その反応として、大笑いするのである。

このように、理解したことが正しい理解であるかどうかはわからない。そこで、理解したことは「ほんとうか」、「正しいか」と問わずにはいられない。この反省の問いによって開かれるのが第三の理性的次元である。反省の問いに対して、「はい」もしくは「いいえ」と答えることが事実判断であり、正しい判断の内容は事実である。

事実は命題によってとらえられるものであり、通常、「～である」、「～ではない」という平叙文で表現される。語義的にも、命題は「判断を言語で表したもの」<sup>10</sup>であり、文章や発言と区別されている。発言とは「口頭で述べられた意見」<sup>11</sup>のことであり、文章とは「文字を連ねてまとめた思想を表現したもの」<sup>12</sup>のことである。そこで、「今日は休講である」と二度くりかえせば、一つの命題、二つの発言、一つの文章がある。「今日は休講である」と言ってから、“We have no class today”と言いなおせば、一つの命題、二つの発言、二つの文章がある<sup>13</sup>。

ここで注意したいのは、命題に対する二つの態度である。一つは、命題に同意せずに、理解にとどまっている態度である。この場合、「である」ということばには、事実を伝える効力がない。人のはなしの受け売りでも、想像上のはなしでも、「である」ということばを使うからである。もう一つは、命題を肯定、もしくは否定の対象にする態度である。この場合、命題によって事実がとらえられることになる。要するに、判断の対象にしないかぎり、命題は単なる意見、考え、見解のまま残るのである。

事実判断の特徴を、二点補足しておこう。まず、正しい判断によってとらえた事実は、主体の判断力に依存していないということである。第一の感覚的次元における感覚の内容は、感覚の働きに依存している。たとえば、同じ味噌汁を飲んで、「濃い」と感じる人と、「薄い」と感じる人がいるのは、味が人の味覚に依存しているからである。また、第二の知性的次元における理解の内容は、知性の働きに依存している。たとえば、同じ数学のテストで、100点をとる人と、60点をとる人がいるのは、理解の内容が人の理解力に依存しているからである。一方、第三の理性的次元においては、そうではない。よく考えてくださった判断であっても、慌ててくださった判断であっても、正しい判断であるかぎり、その内容・事実を否定するほうが間違えることになる。たとえば、「台風の影響で、大学が全学休講である」ことは、早朝の気象情報を見ただ

けで判断しても、大学に電話で問い合わせても、苦勞して大学まで行って確認したとしても、事実であることに変わりがないのである。

もう一つの特徴は、判断によって主体の責任が問われるということである。なぜなら、「ほんとうか」という反省の問いに対して、「はい」や「いいえ」だけでなく、「知らない」とか「そうかも知れない」などと答えることもできるからである。十分な根拠があるのに判断を控えるのは優柔不断であるし、十分な根拠がないのに判断すれば軽率である。要するに、反省の問いにどのように答えるかによって、その人の勇氣、知恵、愚かさなどがあらわにされる。たとえば、花瓶を割ってしまった場合、花瓶を割ったという事実を変えることはできない。責任を回避しようとして言い訳をすればするほど、嘘をつく気まずさを味わうだけであろう。

### 1-3-1 確実な判断

理解したことについて、理にかなった判断をくだすためには、根拠が十分であることを確かめなければならない。では、根拠が十分であることは、どのように証明されるのだろうか。

この質問に答えるために、存在の二つの在り方を紹介しよう。第一に、何の条件もなく存在する(formally unconditioned)こと、そして第二に、条件があり、それらが満たされて存在する(virtually unconditioned)ことである。前者は、必然的に存在するものとしての絶対者の在り方を表している。後者は、偶有的に存在するこの世の物の在り方として、人間がとらえることのできる事実の確実性と一致している。わたしたちが事実判断をくだすさいには、「条件があり、それらが満たされている」という、後者の在り方において、命題を把握することになる。

このプロセスを三段論法で言い表すと、次のようになる。「Aが真であるならば、Bは真である。しかるに、Aは真である。ゆえに、Bは真である」。ここで判断の対象となっているのは、結論の「Bは真である」という命題である。この命題について、「Bが真であることは正しいか」と問いを出す。Bが真であることの根拠となる条件と結論が結びつき、「Aが真であるならば、Bは真である」という条件付きの命題となる。条件と結論のつながりに疑問の余地があるかぎり、条件を再考しなければならない。疑問の余地がまったくなければ、「Aが真であるならば」という条件は、「Bが真である」ことの根拠として妥当である。そこで、「Bは真である」という命題は、客観的な事実として肯定される。換言すると、「Bは真である」という確実な判断がくだされる。

たとえば、「外出中」と書置きがあれば、当人は不在であると考えるのがふつうであろう。しかし、彼女は書置きを消し忘れるくせがある。ほんとうに彼女は外出中なのだろうか。早速、思いあたる場所に行ってみる。玄関に彼女の靴があり、長椅子に彼

女のコートが掛けてある。しかし、一度帰ってきてコートを脱ぎ、靴をはきかえて、また出かけたのかもしれない。さらに進んでいくと、廊下の隅に、今朝買って来てと言っていた果物の袋が置いてある。それでも、別の人に買って来てもらったのかもしれない。ところが、食堂から彼女の笑い声が聞こえてきたとき、これ以上確かめる必要がないとわかる。これだけ証拠がそろっていれば、彼女がいるのは確実であり、「彼女は外出中であるという理解は正しいか」という問いに、「いいえ」と正しく答えることができる。彼女が外出中でないことの根拠となった条件は、「靴がある」、「コートがある」、「果物の袋がある」、「声が聞こえる」ということである。

ここで生じる問題は、条件が妥当であるかどうかを、つねに判断によって言い表さなければならないなら、一つの判断をくらすために、判断を無限に遡らなければならない、ということである。ところが、実際は、すべての条件が判断である必要はない。なぜなら、「変化があった」ということは認識過程に内在する働き——感覚的な経験、理解、判断——によって肯定されるものであるが、この判断の根拠となった条件のなかに、この判断の前提となっている感覚的なデータ・経験的な要素が含まれているからである。

一つの具体的な判断を分析してみよう。早朝出勤し、夕方帰宅してみると、家中に煙がたちこめ、床は水浸しになっていた。そこで、すぐに「何かが起こった」と判断したとする。ここで条件づけられているのは、「何かが起こった」という判断である。この判断に先だって、どのような条件が、どのように満たされたかを見てみよう。この場合、条件となるのは、判断や概念のくみ合わせではなく、「早朝の家」と「夕方の家」について感覚的にとらえたことである。たとえば、「早朝の家」は白く、無臭で、乾燥していたが、「夕方の家」は黒く、煙くさく、濡れていた。このような二種類の感覚的なデータ・経験的な要素——白と黒、無臭と煙臭、乾燥と水浸し——が知性によってくみ合わされるとき、「同じものが、ことなるときに、ことなるデータを示している」ことが把握され、「変化があった」ということが肯定されるのである。

次に、「何かがあった」だけでなく、「火事があった」と判断した場合を考えてみよう。すでに火は消えていたことから、この判断は帰宅後の状況に関する理解にもとづいている。では、この理解の正当性はどこにあるのだろうか。ある事柄について理解しても、その事柄について他に問いが出されるかぎり、初めの理解はまだ十分ではないと言える。なぜなら、まだ答えられていない問いによって、初めの理解を補足する、他の理解に導かれるかもしれないからである。他の理解に導かれれば、初めの理解が修正されたり、含意がより明確になることによって、あつまっている事柄を、より高い観点から解釈することができるようになる。一方、ある事柄を理解したあとで、同じ事柄について、他に問いが出ないなら、初めの理解は十分であり、正しいと言える。他に問いが出なければ、初めの理解を補足したり、訂正したりする他の理解が生じ得ないからである。

しかし、他に問いが出ないからといって、十分な正しい理解であるともかぎらない。なぜなら、問題に関心がなかったり、別の問題に注意が移っていたりすることが考えられるからである。それでも、実際に他に問いが出なければ、十分な正しい理解であり、それを肯定することによって確実に判断し、客観的な事実をとらえることができるのである。

以上のことから言えるのは、具体的な事柄を正しく理解しているかどうかの判断は、すでに多くの正しい理解を獲得していることが前提となっているということである。しかし、すでに獲得した理解が正しいのは、自分でそう判断したからではなく、理解を重ねていくなかで、補足や修正がくりかえされてきたからである。一つひとつの理解は、自らを補足・修正する他の理解に導く他の問いを生みだし、さらなる理解に導く。このような学習のプロセスが終わるころには、具体的な状況に精通し、状況判断を的確にすることができるようになっている。何か予期せぬことが起こっても、それについてさらに理解を重ねることで、より一層、状況に精通することになるのである<sup>14</sup>。

### 1-3-2 蓋然的な判断

これまで、具体的な状況についての理解の正しさを肯定する、確実な判断について考察してきた。すなわち、条件と結論のつながりに関連性のある問いが完全になくなった段階でくだされる判断は確実である。一方、関連性のある問いが完全になっていない段階にありながらも、検証することができる範囲内でくだされる判断もある。これを、蓋然的な判断とよぶ。蓋然的な判断の例として、実験科学を考えてみよう。

合理性の集積とも言える実験科学の判断が、確実ではなく蓋然的であると聞くと、意外に思うかもしれない。しかし、実験科学の性質上、当然のことなのである。実験科学の探求も、具体的な状況から始まる。感覚的なデータを集め、実験にもとづいて、それらのデータの間、理解可能な関係をとらえようとする。とらえられた何らかの理解可能な関係は、一般的な仮説や法則で表現化される。仮説や法則は、検証することができる範囲内で、蓋然的に肯定される。言い換えると、仮説や法則は、徐々に検証されていくものであり、修正されたり、新たな問いの発端となったりする可能性に、絶えず開かれているのである。

実験科学の判断でも、かなりの確実性に達することができるのは、仮説や法則が感覚的なデータと接近している場合である。たとえば、地球の引力と物体の関係をとらえたニュートンの万有引力の法則は、世紀にわたって検証されてきたという意味で、確実性の高い法則であると言える。しかし、科学の進歩によって、非ユークリッド空間のような、より高い観点が見つかり、万有引力の法則の有効性が、ユークリッド空間に限られることが明らかになる。このように、感覚的なデータと接近しているところ

では、確実性の高い判断をくだすことができても、自然科学の上部構造をのぼればのぼるほど、確実とみなされていた法則が、その地位を失うことになるのである。

最後に、蓋然的な判断を仮言三段論法でまとめておこう。「Aが真であるならば、Bも真である。しかるに、Bは真である。ゆえに、Aも真である」。つまり、「ある理論が正しいなら、一定のデータを説明することができる。しかるに、一定のデータが確実に説明される。ゆえに、その理論は正しい」、と。確実な判断の三段論法とくらべてみれば、この仮言三段論法が、Aが蓋然的であることを証明しているだけであるとわかる。仮言三段論法を、確実な判断の域に至らせるには、「Aのみが真であるならば、Bも真である」ことを確かめなければならないのである<sup>15</sup>。

### 1-3-3 自己肯定と自己認識

これまで、「わたしとは何か」という問いから出発して、人間の内面に生じるさまじまの働きとそれらの関係を分析してきた。それによって明らかになったのは、「わたし」という内面に、志向性とサイキの働く意識的な領域と、本人が感知することのできない無意識的な領域が開かれているということ、また、意識的な領域には、感覚的次元、知性的次元、理性的次元があり、これらの次元は、知りたいという欲求に貫かれているということ、そしてまた、何かを認識するさいには、「感覚的なデータについての問い、理解、概念化、反省の問い、反省的理解、事実判断」というプロセスをたどるということである。

今述べたことは、「わたしとは何か」という問いの答えとして表現化されたロナーガンの見解である。この見解が正しいかどうかを証明するために、「感覚的なデータ、問い、理解、概念化、反省の問い、反省的理解、事実判断」という認識のプロセスが、実際に自分の意識のデータに反映しているかどうかを見てみよう。第一に、わたしは確かに「見ることができるだろうか」、「聞くことができるだろうか」、「触れることができるだろうか」、「味わうことができるだろうか」、「嗅ぐことができるだろうか」。第二に、何かを理解するさいに、確かに「感覚的なデータについて質問するだろうか」、「考えるだろうか」、「想像するだろうか」、「閃きを起こすだろうか」、「概念化するだろうか」、「表現化するだろうか」。第三に、理解の正しさを判断するさいに、確かに、「理解したことについて反省の問いを出すだろうか」、「条件が満たされていることを把握するだろうか」、「判断をくだすだろうか」。これらのことが自分の意識のデータにおいて一つひとつ確かめられるとき、「感覚的なデータについて問い、理解し、概念化し、反省のために問い、条件が満たされていることを把握し、事実判断をする」ということを肯定することができる。これを自己肯定とよぶ。

さらに、このような認識のプロセス全体が、知りたいという欲求に貫かれていることに気づくとき、このプロセス全体が厳密な意味で「認識すること・知ること」である、ということにも気づくようになる。そこで、知りたいという欲求のダイナミズムにしたがって、認識のプロセスをたどる意識のデータに注意を払い、それらを理解し、その理解の正しさを確かめることができるなら、そのかぎりにおいて自己認識に至ったと言える。換言すると、物事を感じたり、理解したり、肯定したりしている「わたし」は、自分がそのように感じたり、理解したり、判断したりしていることを理解し、さらにその理解が正しいことを責任をもって判断することによって自己認識に至る。これによって、単なる認識者であった「わたし」は、認識するとは何であるかを認識した「わたし」に変えられる。感覚的なデータについて認識のプロセスをたどることは単なる認識であるが、認識のデータについてこのプロセスをたどることは自己認識をもたらすのである。

要するに、自己肯定は、認識についての理論——人間の認識は感覚的な経験、理解、判断から成っているということ——を証明しただけであり、自己認識には至っていない。自己肯定という働きが、自己認識をもたらしたと言えるのは、知りたいという欲求のダイナミズムにしたがって、認識のプロセスをたどる意識のデータに注意を払い、それらを理解し、その理解の正しさを確かめて、認識のプロセスを肯定したかぎりにおいてなのである。

人間がこのように自己認識に至ることができるのは、知りたいという欲求のおかげである。一方、感覚的な欲求しかもたない動物は、自らが生存している環境世界をとらえるすべも、また、感じているところの自らをとらえるすべも感覚でしかないので、「感じっぱなし」であり、第一の感覚的次元に閉じこめられている。しかも、厳密に言えば、動物は感じているところの自らを、感覚的な対象としてとらえているとは言えない。なぜなら、意識的な働きとしての感覚は、ものを感覚的に対象化することはできても、ものを感覚しているところの自らをそのように対象化することはできず、ただ、ものを感覚することにともなって感知するにとどまるからである。たとえば、狼は羊を見ることによって、羊を視覚の対象としてとらえるが、羊を見ているところの自らについては、羊を見ることにともなって感知するだけであり、見ている羊のようには自らをとらえていないのである。ここでは、感覚的次元に閉じこめられている動物の「自己」と、人間が到達し得る自己認識を比べてみよう。

あらゆる生物は、この地球に生存した以上、すでにそこにある環境世界のなかで、自らを維持していこうと努力する。単純細胞生物から人間に至るまでのあらゆる生物の生存努力の在り方を一般的に描きだすと、次のように言える。

まず、一定の環境内に発生し、そこに存在する生物にとって、現にそこに生存していること自体、環境との交渉を初めから引き受けざるを得ない状態に在ることである。つまり、生物はあらゆる能力を駆使して、そのいちばん身近な環境を感得し、いわゆる「環境に対する適応状態」を保って生きている。このような生物の在り方を

可能にしているもの、言い換えれば、生物の適応行動の中心となっているものがあると考えられる。わたしたちはこの中心を、その生物が環境世界との意識的な関わりにもなって感知しているかぎりにおいての生物的な「自己」とよぶことができる。一方、単細胞生物のような、意識的な働きをしない生物には、感知という働きがともなわない。いずれにしても、個々の生物は、それぞれが周囲の環境から必要としているものを摂取し、役立て、さらに、その生物自体を組織していくことになる。

他方、生物が現に生存できているのは、環境のほうが、そこに生存する生物に対して、初めから、その環境に適応できるものとしての能力の発達をうながしていたからであるとも言える。つまり、すべての生物は固有の歴史性を背後にもつと同時に、生存しつづけることによって、その歴史性を発展させ、同時に、個々の組織化を促進する。このように、生物は生存環境との関わりのなかで必要な情報をたくわえ、そのようなものとして、その生物自体を組織していくのである<sup>16</sup>。

以上のことから、感覚的次元に閉じこめられている動物の「自己」とは、生物的な「自己」感知であると言えるだろう。

一方、人間の自己意識は、動物のような感覚的意識だけでなく、知性的意識と、理性的意識を有している。この人間としての自己意識は、他者との関わりをとおして形成されていくものである。すなわち、生まれたばかりの赤ちゃんは、まわりの人の顔の表情、声の調子、意志の表し方などを模倣・再現しながら、人間らしさを身につけていく。微笑みを交わしたり、「アーアー、ウーウー」などの喃語を発したりしながら、感情の表し方、受け取り方、ことばの使い方を学んでいく<sup>17</sup>。また、知りたいという欲求にしたがって、物事を探求したり、理解したり、判断したり、決断したり、実行したりするようになる。

しかも、このようにして形成されていく人間としての自己意識は、知りたいという欲求に貫かれているがゆえに、そのような自己についても問わずにはいられない。かりに人間が自己について問わないとすれば、いくら宇宙の神秘を体感し、それについて探求し、何らかの法則性を見いだしたとしても、自分がそのように感じたり理解したり判断したりしているということを知らないという意味では、「感じっぱなし」、「理解しっぱなし」、「判断しっぱなし」であり、動物とそう変わりがない。しかし、実際、人間は自己とは何かを問うことができる。自分が感じ、理解し、判断しているということを理解し、その理解の正しさを肯定するとき、「感じ、理解し、判断する」認識者としての自己が客観化され、自己認識に至る。このように自分自身のうちに自己を確立することができるという点で、人間は動物とことなるのである。

以上をもって、認識者としての「わたし」に関して、「わたしとは何か」という問いに答えることができるようになった。しかし、「わたしとは何か」という問いに最終的に答えるためには、次項に述べる実行者としての「わたし」にとりくまなければならない。

## ■ 第二部 実行者としての「わたし」

### 2-1 第四の実存的次元

日常生活は、机のまえで「わかった」とか「正しくない」とか言っているだけではすまない。時々刻々と状況が変わっていくなかで人と交わり、さまざまな計画を立てたり、機転を利かせて物事に対処したりすることが要求される。たとえば、この一日をふりかえると、勉強したのはほんのわずかで、後は、聖堂でともに祈ったり、食事をしたり、掃除をしたり、病人を見舞ったり、買い物をしたり、料理をしたり、車を出したり、新聞を読んだり、音楽を聞いたりしている。実は、このように物事を実行することは、実行することのできる意味の領域、すなわち、価値の領域に属している。事實は認識されるにとどまるが、価値は認識されるだけではすまない。人間の生活はさまざまな価値に満ちており、認識者である「わたし」は、何らかの価値を実行せずにはいられない実行者なのである。換言すると、「わたし」という存在それ自体が「価値発現体」のようなものである。その意味で、机のまえで純粋な認識的な活動にふけることも、すでに実行者としてのいとなみに属していると言えるだろう。

この実存的な領域こそが人間生活の舞台であり、事実判断に至る認識的な過程を統合する、第四の実存的次元を構成している。相撲は土俵でとるものであるように、人は生きていくかぎり、いやでもこの次元で勝負しなければならない。朝、目覚めると、もうそこに、新たな一幕が始まっている。中央で堂々と、とりくむことも、隅のほうでこそそと、とりくむことも勝手だが、逃げも隠れもできない。そこには「わたし」という存在全体がくみこまれているがゆえに、行為する「わたし」としての責任が問われ、その真価が問われる。一人ひとりの人間性がもろに表れ、「わたし」がこれまで何を大切にしてきたか、何に価値を置いて生きてきたかが、他者と分かち合われる。「五十になったら自分の顔に責任をもて」と言われるのは、価値が生きることのできる意味として、日々、いのちを形づくるものだからである。

#### 2-1-1 実存的次元とサイキ

この第四の次元に生きる「わたし」の特徴は、意識を構成している二つの要素——志向性とサイキ——の役割が、それまでと逆転するところにある。

第一から第三の次元に至る認識的な過程で、意識をリードしていたのは、サイキではなく、私心なく知ろうとする志向性であった。つまり、感覚的なデータについて



「何か」、「なぜか」と質問した知性や、理解したことについて「ほんとうか」、「正しいか」との反省の問いを出した理性は志向性に属するが、サイキのほうはあくまでも、志向性に協力するものとして方向づけられていた。

この点を明らかにするために、サイキの観点から、クイズを解いたプロセスをふりかえってみよう。クイズが出されたとき、厄介な問題を押しつけられた、というような「うっとうしさ」を感じながらも、「わくわく」した感じがした。さっきまで「のどが渴いて」いたはずなのに、気がついたら、そんなことはすっかり忘れてクイズにとりこんでいた。想像力を使ってさまざまの「イメージ」を思い浮かべたが、「霧のなか」を歩いているような「もやもや」とした感じがした。ヒントが与えられたとき、「一条の光」がさしこんだような「希望」を感じた。ヒントに沿って「三角形」のイメージを思い浮かべたとき、思わず「あっ」と叫んだ。答えは北極点。そのとたん、肩の力が抜け、「解放感」がこみ上げてきた。正解は、やはり北極点だった。

このように、第三の次元に至るプロセスにおいては、サイキは「うっとうしさ」、「わくわく」、「のどの渇き」、「霧のなか」、「もやもや」、「一条の光」、「希望」、「三角形」、「あっ」、「解放感」というようなさまざまの感じやイメージをたどりながら、クイズを解こうとする志向性の働きを支えていたことがわかる。のどが渴いていると、お茶、ジュース、自動販売機などのイメージが浮かんでくることがある。また、いくら考えても、もやもやした感じがするために、嫌気がさして、投げだしたくなってしまうこともある。しかし、サイキはそのつど志向性によって方向づけられ、三角形のイメージが描きだせるまでになっていったのである。

それに対して、第四の実存的次元ではどうであろうか。実は、この次元を初めにリードするのは、志向性ではなくサイキである。ここでは、サイキは日常生活のなかで合うさまさまの価値をいちやくキャッチする「価値探知機」の役割を果たしている。すなわち、価値として実現され得る対象 (possible value) は、まず、サイキ——正確に言うと、一定の対象をめざす志向的な感情 (intentional feeling) ——によって感じとられる。次に、志向性はその対象について熟慮のための問いを出す。「それはわたしにとって善いことだろうか」、「それは実行するに値するだろうか」と。志向性とサイキが協働でよく吟味した結果、志向性が責任をもって「はい」、もしくは「いいえ」という価値判断をくだす。そのとき、「わたし」は単なる好悪の感情を超えて、価値の領域に参入する。価値判断によって得られた価値を、自分のすべてをかけて実行しようと決断するとき、初めて、志向性とサイキは一致し、実際に実行に移すことができるようになる。やろうとしても体がついてこなかったり、やってみても三日坊主だったりするのは、志向性とサイキが合意に達することに失敗しているからであろう。

たとえば、ある男性がある女性と恋に落ち、つき合い始めるとしよう。しばらく過ごすうちに、彼は彼女と生涯をともにしたいと望むようになる。熟慮のすえ、彼は彼女にプロポーズする。その後、二人はめでたく結婚する。この場合、彼のサイキが、まず彼女

の魅力を感じとったのであり、志向性がいろいろの理由を並べたからではないだろう——政略結婚であれば、はなしは別だが。彼は彼女と会うたびに、「彼女と結婚したい」と感じるようになった。次に、「彼女と結婚したい」という感じについて、志向性が熟慮のための問いを出した。「彼女と結婚するのは善いことだろうか」と。よく熟慮した結果、「善いことである」という価値判断を志向性がくださった。「彼女と結婚する」という価値を、自分のすべてをかけて実行しようと決断したことで、彼の志向性とサイキは一つになり、彼は彼女にプロポーズした。その後、二人はめでたく結婚した。

このように、第四の次元を生きる「わたし」は、価値として実現され得るものをとらえる志向的な感情、真に価値があるか否かを吟味する熟慮、真の価値を肯定する価値判断、真の価値を実行しようという決断、そして実行というプロセスから成っている。第一から第三までの認識的な過程は第四の次元の大前提であり、この第四の次元に、ことごとく、くみこまれているのである。

## 2-1-2 自己超越

第四の次元まできたところで、「わたし」の内面の動的性質を特徴づけている「自己超越」という側面を明らかにしたい。自己超越とは、意識を貫く志向性のダイナミズムにくみこまれている原理であり、四つの意味に理解されている。ここでは、初めの三つを紹介したい。

第一に、一般的に言って、意識は自らの次元を超越していくものである。すなわち、感覚から理解へ、理解から事実判断へ、事実判断から価値判断へと、より高次の意識段階に向かうものである。

第二に、厳密な意味では、責任をもって正しい事実判断をくだすときに行われる認識的自己超越がある。感覚的な経験の内容は、感覚の働きに依存しており、理解の内容は、知性の働きに依存している。一方、正しい事実判断の内容は、主体の働きに依存していない事実である。その意味で、「わたし」は、事実を肯定することによって、認識的に自己を超越すると言える。自己を超越することは、自分に依存していないものを自分がとらえることであり、ここに神秘がある。

第三に、自分のすべてに関わる実存的自己超越もある。すなわち、単なる好悪の感情を乗り越え、ほんとうに実行に移すだけの価値のあるものを肯定し、その価値を実行に移そうと決断する。真の価値は正しいものとして主体に依存していないため、その価値を実行することで、これまでの「わたし」から新たな「わたし」へと、自己を超越していく。かりに地球と物の間に「重力の法則」があることを知ったからといって、それを知った「わたし」が「重力の法則」になるわけではない。一方、何らかの価値を悟り、それを実行に移すとき、悟った「わたし」は悟ったものに変えられていく。女性が母

親になることも、医学生が医者になることも、自分のすべてが関わる自己超越的ないとなみである。言い換えると、実存的自己超越とは、絶え間ない自己形成の歩みなのである。

### 2-1-3 実存的次元と愛

単なる好悪の感情を乗り越え、実行するだけの価値のあるものを肯定し、その価値を実行に移すことを決断し、実際に実行するとき、「わたし」の存在全体が「愛してしまう」という実存的な状態になる。換言すれば、愛するとは、実存的自己超越を生きることである。「理解し、反省し、熟慮するために問いをだす志向的な能力は、愛してしまうことにおいて、実際に実行に移される。愛してしまうまでには、さまざまのいきさつがあっただろう。しかし、ひとたび愛するようになると、その状態がつづくかぎりにおいて、愛がその人のすべてを司る原動力となる。つまり、望みも、恐れも、喜びも、悲しみも、さまざまの価値の取捨選択も、すべて、この愛してしまうということから生じてくるのである」<sup>18</sup>。

この状態は実存的自己超越のダイナミズムそのものであるがゆえに、自分へのこだわりを捨て、自分のすべてを何らかの価値に投じることをとおして、内的に統合されることを要求する。すなわち、サイキによって感じ取られた価値は、熟慮の結果、志向性によって肯定されるだけでなく、サイキと志向性が決断において、文字どおり「意気」投合し、いわば「二人三脚」で、その価値を実現すべく進んでいかなければならないのである。このような愛の状態には、さまざまの種類があり、たとえば、夫婦、親子、兄弟の絆、友人とのつながり、国や社会などとの関係をとおして、さまざまに体験されるものである。しかし、いずれの場合も、内的な統合が「愛してしまう」ということの鍵となる。情を抱いているだけでも、理想を語っているだけでもだめである。いかなる状況であれ、「わたし」という存在の意味が、サイキを真の志向性の働きにしたがわせていくプロセスのうちに実現していくという意味で、「わたし」の本来性は、「愛してしまう」ということのうちに見いだされると言えるのである。

ここで注意したいのは、この第四の次元において、自己超越的ないとなみがとらえるさまざまの価値のなかに、宗教的な価値が含まれていないということである。第四の次元における自己超越的な愛と、次節であつかう、第五の次元の宗教的な愛——無制約の愛——とは、性質がことなるのである。

### 2-2 第五の宗教的次元

すでに指摘したように、知りたいという欲求は、質問したり答えたりすることによって意識の次元を引き上げていく志向的なダイナミズムである。それゆえ、知性的次元からは「何か」、「なぜか」という問い、理性的次元に入るさいには「ほんとうか」、「正しいか」という問い、そして、実存的次元においては「わたしにとって善いことか」、「やるだけの価値があるか」という問いが出された。これらの問いは、答えを収納するための新たな意識の領域を開き、答えがその領域を満たす。感覚的な次元からは、問いではなく、感覚の欲求自体が満たされる領域を準備し、欲求の対象がその領域を満たす。たとえば、野球をして遊んでいた子どもがおなかを空かせておにぎりを食べるとき、空っぽだった胃袋がおにぎりですべて満たされる。また、「なぜボールは上から下に落ちるのか」と疑問を抱くとき、その子どもの意識に知的領域が開かれ、理科の授業などで、その領域が満たされていく。家の鍵をなくしてしまった場合、「鍵がないのはほんとうか」と自問することによって、暗黙のうちに意識の理性的領域が開かれ、その問いに正直に「はい」と答えるとき、その領域が満たされる。母親が夜中に起きて赤ちゃんの世話をするとき、「赤ちゃんの世話をすることは、わたしにとって善いことか」という声にならない問いによって実存的領域が開かれ、実際に世話をすることによってその領域が満たされる。このように、問いによって開かれた領域は、理解したことや、真理や、真の価値の実行によって満たされていくのである。

では、人間にとって、問うことのできないものはあるのだろうか。問うことのできないものがあるならば、その「問うことのできないものとは何か」と問うことができる。また、人間にとって理解できないものがあるならば、その「理解できないものとは何か」と問うこともできる。その意味で、人間が問う対象にも、問うこと自体にも制約がない。このことは、「わたし」の内面に、制約のない領域が広がることを暗示している。つまり、素朴な子どもも、多感な若者も、経験豊富な大人たちも、これまでの次元のなかで出してきた問いとはまったくことなる、ある不思議な問いを抱き得る。それは究極的な実在に関する問いであり、この問いによって開かれる制約のない領域が、宗教的次元である。この次元こそが「神の座であり、至聖なるものの神殿である」<sup>19</sup>と、ロナーガンは指摘している。

### 2-2-1 究極的な実在に関する問い

究極的な実在に関して起こり得る、三種類の問いをあげよう。第一は、意識の知性的次元に関連している。たとえば、「コンピューターを設計したのは人間の知性である。では、コンピューターよりもはるかに複雑なこの宇宙のシステムは、何らかの知性によって設計されたのだろうか」、という問いがある。第二は、意識の理性的次元に関連する。たとえば、「人はみな、血縁関係をもって存在しているが、このようなつ

ながらは、何の条件もなく必然的に存在しているものを前提としているのではないだろうか」、という問いがある。第三は、意識の実存的次元に関連する。たとえば、「この美しい公園は、公共善のため、国によって整備されている。では、壮大な秩序のもとにあるこの宇宙は、何らかの価値判断の結果、造りだされ、維持されているのではないだろうか」、という問いがある<sup>20</sup>。

### 2-2-2 制約のない愛

このように、人間は、さまざまの出来事のうちに、究極的な実在の存在を問うことができる。以上のような三つの問いのどれか一つにでも肯定的に答えることができるなら、究極的な実在の存在を認めることになるだろう。ところが、これらの問いに答えようとして人間がいくら頭をひねっても、満足いく答えが得られないというところに、他の次元の問いとは根本的にことなる不思議さがある。と言うのも、究極的な実在に関する問いによって開かれた「わたし」の内面の、制約のない領域が満たされるのは、「わたし」が苦勞して答えを見つけることによるのではなく、究極的な実在自体から一方的に答えが与えられることによるからである。その答えとは、どのような限界も制限も被らない、究極的な実在の、制約のない愛である。この愛が注がれるとき、「わたし」の存在全体は、意識の実存的次元の極致に開かれている第五の宗教的次元、すなわち、「無制約に愛してしまう」という状態を生きるようになる。いくら背が伸びても、人間の頭上に「第二の頭」が出現することがないことを、わたしたちが体験から知っているように、無制約の愛が注がれて、無制約に愛してしまった人は、意識の宗教的次元の先に、「第六の次元」なるものが開かれていないことを、体験をとおして知るようになる。内面の各次元で発せられるあらゆる問いが、究極的な実在についての問いを暗示しているように、志向的ダイナミズムが総力をあげて目指していたのは、この「無制約に愛してしまう」という境地であった。

宗教心の本質は、この制約のない愛にあるとロナーガンは指摘する。この愛は、「わたし」の産物でも、功德によるのでもなく、究極的な実在から一方的に与えられるという意味で、たまものである。「わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったから」<sup>21</sup>である。ところが、たまものとして制約のない愛が注がれ、宗教的次元に目覚めても、自分がどういう方を愛してしまっているかはよくわからない。「谷川の水を求めて、喘ぎさまよう鹿のように」<sup>22</sup>、「わたし」の存在全体がある方をひたすら求め、慕っている。それで、宗教的次元に目覚めた人は、宗教的次元に関連する、究極的な実在に関する問いを出さずにはいられない。これがもう一種類の問いである。「わたしが愛してしまっているのは、どなたですか」、「わたしが愛してしまっているのは、どういう方ですか」と。たとえば、アウグスティヌスは回心した後、「主よ、わたしはあ

なたを、疑念を抱きながらではなく、確信をもって愛しています。あなたはわたしの心を、みことばをもって貫かれましたから、あなたを愛してしまいました」<sup>23</sup>と告白しながらも、「神を愛するときに、わたしは何を愛しているのでしょうか」<sup>24</sup>と問うている。この愛の対象が、真そのものであり、善そのものであり、美そのものである、というような一般的な答えに導かれることはあっても、具体的な答えについては、それぞれの宗教伝統にうったえなければならないのである。

ユダヤ・キリスト教の伝統では、意識の宗教的次元は、イスラエルの民への啓示によって開かれた。聖書のなかに見られる制約のない愛の働きを考察し、理解を深めてみよう。イスラエルの民は、この世を完全に超える方が、自分たちの歴史に介入なさったことを体験する。「神は、その愛と英知によってご自分を啓示し、また意志の奥義を明らかにしようと望まれ」<sup>25</sup>、民がご自分を受け容れることができるように、ご自分の無限の愛を民の内なる領域——宗教的次元——に注がれた。この愛が「聖霊によって、わたしたちの心に注がれ」<sup>26</sup>たのは、わたしたちが「神から与えられた啓示に対して自発的に同意して、自由におのれをまったく神にゆだねる」<sup>27</sup>ようになるためである。聖霊によって注がれた愛のおかげで、神に惹きつけられ、無制約に愛してしまった民は、その方を自分たちのよりどころとし、ご自分を啓示なさるその方のことばに耳を傾け、その方について少しずつ理解を重ね、その方がどういう方であるかを言い表し、その方のことばを実行し始める。互いの善を願い、仕え合う、隣人愛のつながりを生きるようになる。そのように生きることをとおして、イスラエルの民は、神と人との驚くべき愛の交わりの証人となり、イスラエルの歴史全体は、神の民の不思議なドラマとなった。このドラマを導いておられる「至高の神の全啓示を、自らにおいて完了された主キリストは、かつて預言者によって約束され、自ら実現し、かつ自分の口をもって宣布した福音を、救いに関するあらゆる真理と道徳の源として、すべての人にのべるよう、また、神のたまものを彼らに与えるよう、使徒たちに命じた。この命令は、キリストのことばを聞き、キリストとともに生活し、そのわざを目撃して知ったことや、聖霊の示唆から学んだことを、口述説教と模範と制度をもって伝えた使徒たちによって、また、同じ聖霊の靈感により、救いの知らせを書きものにした使徒たちと、使徒時代の人たちによって、忠実に遂行された」<sup>28</sup>。ローマ人への手紙のなかで、パウロは次のように述べている。「死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引きはなすことはできません」<sup>29</sup>。また、リジューの聖テレジアは、神の愛に応じて、次のように告白する。「わたしの神、至福の聖三位よ、わたしはあなたを愛し、人びとにもあなたを愛させたいと思います」<sup>30</sup>。

次に、わたしたちの内面にたまものとして注がれる、制約のない愛の特徴を考察しよう。第一に、宗教的次元と、それに先立つ感覚的、知性的、理性的、実存的次

元の共通点は、それらがともに、一人ひとりの意識に属しているということにある。すでに述べたように、宗教的次元は、意識から切りはなされているわけではなく、無制約に問いを出す志向的ダイナミズムが、種々の次元を通じて向かっていた意識の最終次元である。したがって、制約のない愛が注がれ、その愛を実際に生きるなかで、どのような神秘的あるいは超越的な体験をしたとしても、その体験は「わたし」という個人の意識のデータとしてとりあつかわれることになる。

第二に、無制約に愛してしまうことは、宗教的次元において実存的自己超越を生きることである。これが、先に指摘した、四つ目の意味における自己超越である。換言すると、サイキが真の志向性と一致して、「わたし」を存在させた方から示される存在意義を、責任をもって実現していくことである。この自己超越は、他の二つの自己超越——正しい事実判断によって自分に依存しない事実をとらえる認識的自己超越と、正しい価値判断によって自分に依存しない価値をとらえ、その価値を実行に移していく実存的自己超越——をことごとく止揚する、実存的なダイナミズムであり、「わたし」の全生活をとおして、かぎりなく深められていくものである。その意味で、「わたし」の本来性は、無制約に愛してしまうことのうちに、最高のかたちで見いだされると言えるだろう。一方、どんなに素晴らしい愛の体験をしたとしても、その愛に応じて実際に生きようとしなければ、体験は不毛であり、なることのできた自分になり損ねてしまうことになる。聖書のなかに登場する、あの金持の青年のように、愛の招きを受けても、受け容れずに立ち去ってしまうのは、残念なことである<sup>31</sup>。

第三に、「制約のない愛からほとぼしりである認識の働きを信仰心(faith)とよぶ」<sup>32</sup>。データについて質問し、理解し、肯定することによって事実を認識したり、熟慮と価値判断によって価値を認識したりすることは、人間の力でなしとげられることである。一方、人間の力ではどうにもならない認識もある。すなわち、「感覚的な経験、理解、肯定というプロセスをたどる認識のほかに、愛してしまっている人の価値判断をとおしてなされる、種類のことなる認識がある」<sup>33</sup>。この後者の認識は、「その人の抱いている愛が、意識の宗教的な次元に注がれた制約のない愛のたまものであり、そこから生じた認識であるときに、信仰心とよばれる。ここでは、信仰心が生じる人間の意識の状態と、信仰心の根本的な内容について考えてみよう。

わたしたちは、日ごろ、さまざまな価値に取り囲まれて生活している。たとえば、一人ひとりが生存していくために不可欠な衣、食、住などの生命的価値、共同体として生活していくために必要な技術、経済、政治などの社会的価値、そして、これらの価値に支えられた人間生活の意味をになっている大学や研究所などの文化的価値もある<sup>34</sup>。しかし、それだけでなく、超越的価値というものがある。超越的価値とは、制約のない愛と、そして、その愛からほとぼしりである信仰心の内容であり、信仰心の内容は、一種の内なる啓示によって知られるものである。この啓示は、いわば「雲に包まれた」ものではあるが、次のように客観化することができる。

制約のない愛は、人間の意識に根源的な充足をもたらすものである。わたしたちは、問うことをとおして、この世の理解可能なものや、真のものや、善のものに導かれる。しかし、志向性はそれだけでは満足しない。問いのダイナミズムにしたがって、究極的に理解可能なものや、究極的に真のものや、究極的に善のものについても、問わずにはいられない。このような問いを抱えている「空っぽ」の志向性は、制約のない愛というたまものが与えられることによって、意外にも、根源的に満たされてしまう。そのように満たされたうえで、志向性はなおも問いつづける。「この制約のない愛とは何か」、と。結局のところ、この愛は、理解可能なもの、真のもの、善のものを求める志向性を満たすものとして、理解可能なものそのもの、真そのもの、善そのものにちがいないという認識に導かれる。この認識は、この愛の与え主が、制約のない愛そのものであることを暗示している。つまり、制約のない愛そのものが神であり、人間が受ける制約のない愛は神の愛——キリスト教的に言えば、この宇宙を創造し、その救いを計画した神の愛——である、と。これこそが、制約のない愛からほとぼしりである信仰心の根本的な内容であると言える。「雲に包まれた」啓示ではあるが、人間にとっては開眼である。わたしたちは、制約のない愛からほとぼしりである信仰心をもって、この世のあらゆる出来事を眺め、理解し、肯定し、絶望のうちにあっても、絶えず、希望の光を見いだすことができるのである<sup>35</sup>。

「信仰心によって肯定される超越的価値のなかには、個々の宗教の信条 (beliefs) や、個々の宗教が肯定している事柄が含まれている」<sup>36</sup>。言い換えると、信者は、制約のない愛からほとぼしりである信仰心をもって、さまざまな問題にとりくみ、自分の宗教伝統の種々の信条を発見し、それらを正しいものとして肯定する、つまり、信じるようになる。また、そのように自分の宗教伝統に属する信条を受け容れることが一つの価値であるということも発見するようになる。たとえば、キリスト教の三位一体という信条がそれである。要するに、制約のない愛からほとぼしりである信仰心の根本的な内容とは、理解可能なものそのもの、真そのもの、善そのもの、聖そのもの——その愛の与え主である制約のない愛そのもの——であり、これらの内容に照らして、さまざまな問題にとりくむことによって、個々の信条が生まれてくるのである。

信仰心をとおして、自分の宗教の「おしえ」から学ぶことは、宗教的な自己超越を生きるための助けとなる。キリスト者であれば、制約のない愛からほとぼしりである信仰心をとおして表現化された聖書を使って祈る。聖書は、人間が使うことばによって啓示されたみことばをとおして、神の現存を伝えている<sup>37</sup>。聖書を読み、思い巡らし、実感し、少しずつ理解していくことによって、その豊かさが、一人ひとりの生活全体に浸透していくことになるだろう。

以上のように、制約のない愛と、信仰心と、信条を区別することによって、個々の宗教伝統の共通点と相違点を指摘することができる。すなわち、個々の宗教伝統で信条がちがっていても、信者の意識の宗教的次元と、そこに注がれる制約のない愛



のたまものと、そして、そこからほとぼしりである認識の働き(信仰心)は、すべての宗教伝統に共通しているのである。

第四に、人間の意識を貫く二種類のベクトルを性格づけよう。一つは、創造的ベクトル(creating vector)であり、「経験から理解へ、理解から肯定へ、肯定から決断と実行へ、制約のない愛へと意識の次元をたどりながら創造性を発揮する。一方、癒すベクトル(healing vector)は、創造的ベクトルを癒すものとして、その逆の過程をたどる」<sup>38</sup>。すなわち、制約のない愛からほとぼしりである信仰心、信仰心によって肯定していることについての理解、その理解にもとづく実行という過程である。創造的ベクトルの働きは常軌を逸しやすく、それぞれの次元で、軌道修正が必要になる。たとえば、感覚的なものに執着したり、自分にとって都合の悪い問いをはぐらかしたり、問われても考えないようにしたり、理解しても表現化することを恐れたり、正しさを曖昧にしたり、嘘をついたり、言い訳をしたり、善いとわかっているにもかかわらず実行しなかったり、制約のない愛を拒んだりする。このようなとき、真の志向性の働きにサイキをしたがわせることによって、創造的ないとなみを回復させることができるのが、癒すベクトルである。具体的には、イメージを生み出すサイキ、閃きを起こす知性、事実を肯定する理性、価値の判断力、決断力、実行力、責任感、制約のない愛に依って生きる宗教心などに働きかけて、それらを自己超越的に方向づけるのである。

## ■ 第三部 心について

### 3-1 心とは何か

心というのは便利なことばで、「心をこめる」、「心が痛む」、「心がける」などのさまざまな表現がある。そのどれにも共通して言えるのは、心が「わたし」と切りはなすことのできない「何か」を言い表しているという点であろう。その「何か」とは何だろうか。広辞苑によると、心とは、「人間の精神作用のもとになるもの、また、その作用」<sup>39</sup>であり、「わたし」の内面の根本であることが暗示されている。わたしたちが心と聞いて、「頭」ではなく、「心臓」を連想するのも、体内に血液を行きわたらせる心臓のように、心が「わたし」の内面の全域と深く関与していることを、予感しているからかもしれない。

パスカルの名言に、「われわれは理性によってのみでなく、心によって真実を知る一パンセー」とある。この発言を、内面の構造の観点から解釈することで、心というものを新たに意味づけることができるだろう。すでに述べたように、人間の意識は、認識を構成する三つの次元と、実存的な二つの次元から成っている。前者は、感覚的なデータについて問い、考え、理解し、反省の問いを出し、判断することによって事実を知るというプロセスであり、後者は、志向的な感情によってとらえられた実現可能な

価値について問い、熟慮し、価値判断をくだし、決断し、実行するというプロセスと、そして、無制約の愛に応えるプロセスである。このことからパスカルの名言を解釈すると、次のようになる。「意識の認識的次元をたどる認識のほかに、愛してしまっている人の意識の実存的次元における価値の認識があり、さらに、無制約に愛してしまっている意識の実存的次元からほとぼしりである宗教的な認識(信仰心)もある。したがって、パスカルの言う理性とは、前者の認識的次元を指しており、心とは、後者の実存的次元を指している」<sup>40</sup>、と。

このように、心という概念を「わたし」の実存的次元に位置づければ、一般に、広く用いられている心ということばの豊かさを、再発見することができる。すなわち、心とはある意味で——生活全体が心に止揚されるかぎりにおいて——「わたし」の生活全体であり、生きている「わたし」そのものである、と。したがって、「心をこめる」と言えば、「わたし」のすべてを何らかの価値に投入して行うことであり、「心が痛む」と言えば、「わたし」の存在全体がその痛みに与っていることになる。心が「わたし」の内面の全域と深く関わるものであり、「わたし」から切りはなすことができないのは、当然のことであろう。尚、ここからは、認識を構成する初めの三つの次元をマインド(mind)とよび、最後の二つの実存的次元を心(heart)とよぶことにする。

### 3-1-1 止揚

心とマインドは、どのように関わっているのだろうか。すでに指摘したように、意識には三つの自己超越がある。すなわち、マインドにおいては、正しい事実判断によって主体に依存していない事実を知るといふ、認識的自己超越がある。心においては、正しい価値判断によって主体に依存していない真の価値を肯定し、その価値を実行しようと決断し、実際に実行する実存的自己超越と、それから、制約のない愛に応えて生きる実存的自己超越がある。ここでは、これらの自己超越を特徴づけている、止揚という側面に着目しよう。止揚とは、「より高次のものが、低次のものを超えていくことであり、また、低次のものは、より高次のものを成立させるために不可欠であるがゆえに、より高次のものが、低次のものを否定することなく、それを保ちながらも、新しく明らかな要素を取り入れて、より高次の基盤のもとで、さらに豊かに活かしていくことである」<sup>41</sup>。この止揚という側面からマインドと心をとらえれば、すべての水が海に流れこむように、心がマインドと体のあらゆる要素をくみこんだ、「わたし」の総合的な次元であるとわかるだろう。

まず、マインドについて見てみよう。無意識的な働きによって維持された体を前提として、意識の第一の次元の感覚は、第二の次元の理解によって止揚され、この理解は、第三の次元の判断によって止揚される。第二の次元の理解は、第一の次元

の感覚を否定するわけではない。なぜなら、理解は感覚の次元を超えると同時に、感覚の次元における経験を、さらに豊かなものにするからである。たとえば、タルティーニの「悪魔のトリル」を聴き、一種の物悲しさを感じるだけでなく、そのヴァイオリン・ソナタにまつわる伝説——タルティーニが悪魔に魂を売って伝授された作品であること——を理解することで、最初の物悲しさが一段と深まってくるだろう。また、第三の次元の判断は、第二の次元の理解と無縁になるわけではない。なぜなら、正しい事実判断によって得られる事実とは、正しい理解のことだからである。たとえば、電車が遅れているとアナウンスがあり、そのように理解したことは、実際に、電車が定刻どおりに来ないことから、正しい理解であると判明する。

次に、心について見てみよう。第三の次元で得られた事実は、第四の次元の真の価値によって止揚され、この真の価値は、第五の次元の究極的な価値によって止揚される。第四の次元の真の価値は、第三の次元の事実と無関係であるどころか、むしろ、それを前提とする。たとえば、ある学生が医学を志すようになるまでには、「子どものころから医者に憧れていた」とか、「両親が賛成している」とか、「成績がよい」とかというようなさまざまな事実をもとに、熟慮したにちがいない。また、第五の次元の無制約に愛してしまうという体験は、第四の次元で実行される真の価値を変貌させる。たとえば、神を無制約に愛してしまっている先生は、生徒を愛することをおして、神に礼拝をささげている。「神は、あなたがたが子どもたちに対してすることを、あたかもご自分に対してなされたかのように受け取られます」<sup>42</sup>、と聖ラファエラ・マリアは書いている。このように、無制約の愛は、他のすべての価値を止揚するのである。

最後に、心とマインドの関係を、第五の宗教的次元と、他の四つの次元との関係をおして見てみよう。制約のない愛に応じて修道生活をしている人が、「人類の救いのため」という宗教的な意向で断食し、空腹を覚えるでしょう。この場合、空腹という感覚自体は、無意識的な働きによって維持された体を前提として、意識の第一の次元に生じるものであるが、この空腹の体験は、無制約に愛してしまっている主体によって、礼拝もしくは犠牲の行為として止揚される。このように、第五の次元をおして、マインドと体のあらゆる要素は、心に止揚されるのである。

この最後の点を、順を追って説明しよう。まず、空腹を覚えると、その感覚と「くうふく」という音との関係をとらえる理解が起こり、その理解が「空腹」ということばで表現化される。空腹がつづくことから、「空腹」という理解は、「確かに空腹である」という正しい自己理解に変えられる。しかも、このように空腹を覚えるのは、単に食べる時間がなかったからでも、医者に言われて減量しているからでもなく、無制約に愛してしまっている修道者が、「人類の救済のため」という宗教的な意向で断食しているからである。つまり、「確かに空腹である」という事実は、「人類の救済のため」という宗教的な価値を実行に移した結果である。このように、「より高次のものが、低次のものを超え」<sup>43</sup>、最高次のものに至る。

また、初めに覚えた空腹は、理解されることによって、「空腹」という意味を帯び、さらに、正しく理解されることによって、「確かに空腹である」という意味が加わり、さらにまた、制約のない愛に応える生活をとおして、「人類の救済のため」という宗教的な意味がつけ加わる。このように、低次のものは、より高次のものに移行することによって、「新しく明らかな要素」<sup>44</sup>を帯びたものとなる。

また、低次のものは、「より高次の基盤のもとで、さらに豊かに生かされる」<sup>45</sup>。すなわち、空腹感は、マインドによって定められる基盤を超える、制約のない愛によって定められた宗教心という最高の基盤において、「人類の救済のため」に神にささげられるものとなる。

以上のことから、心と「わたし」の内面の全域との関係が明らかになる。すなわち、心とはマインドと体のあらゆる要素を止揚する、生きている「わたし」そのものなのである。

### 3-1-2 三位一体と心

最後に、キリスト者が信じている三位一体の神と、人間の心の関係について一言述べる。聖書によれば、人間は「神にかたどって創造された」<sup>46</sup>もの、「神の本性にあずかる」<sup>47</sup>ものである。では、三つのペルソナにおける唯一の神「父と子と聖霊」は、どのように人間の心に刻まれていると言えるのだろうか。どのように、人間は神の本性にあずかると言えるのだろうか。

アウグスティヌスは、自己を内省することによって、記憶するという能力の素晴らしさに目覚め、想いだして物語るということがどういうことであるかについて考え始める。「記憶という広大な広間には、感覚によって運びこまれたさまざまな事物についての数かぎらない心象の宝庫があります。そこにはまた、感覚に触れたものを思惟によって増減し、あるいは何らかの仕方によって変えることによって得られたものが、ことごとく収められています。わたしがその宝庫のなかに入って、何でも自分の欲するものを出すように命ずると、あるものはそくざに見つかりますが、あるものは探すのになかなか手間がとれ、何か隠れた倉庫からでも引き出す場合のように引きだされてきます。このようなものを心の手で想起の面前から追いはらって行くうちに、やっとのことで、求めているものが霧のうちからぼんやりと表れてきて、隠れた場所から眼前に引きだされます。わたしが何か思い起こしながら物語るときには、以上に述べたすべてのことが起こっているのです」<sup>48</sup>。こうした考察は、彼がのちに三位一体のかたどりについて理解していくきっかけになったと考えられる。「三位一体を見るためには、存在する、知る、意志するという三つのもを、自分自身のうちに探してみたらどうかと思います。すなわち、わたしは知りかつ意志する者として存在し、自分が存在しかつ意志することを知り、また、

存在し知ることを意志します。この三つのもののゆえに、そこに三位一体があるのか、それとも、各々のうちにこの三つが含まれ、したがって各々に即して三つが認められるのか<sup>49</sup>、と。このようなアウグスティヌスの考察をヒントに、想いだして物語るという働きのうちに、三位一体のかたどりをみることができる。すなわち、想いだすこと、想いだされた内容、そして、その内容を物語ることはそれぞれことなるが、同じ「わたし」の内面の創造的ベクトルのうちに見いだされる、と<sup>50</sup>。

トマス・アクィナスは、こうした考えにしたがって、三位一体論を展開させた。しかし、彼はアウグスティヌスとはちがって、記憶から出発せずに、靈魂の「内なることば」(verbum interius)に焦点をあてた。アクィナスによれば、「内なることば」——概念——は閃きから生じるものであり、閃きによってとらえられた何らかの理解可能な関係を言い表している。一方、閃きから「内なることば」が生じるプロセス(emanatio intelligibilis)自体は、「受動的なものではなく、実際に働いている知性の働きとして、能動的に理解可能なものであり、外から強いられた法則にしたがうのではなく、すべての理解可能な法則の根拠である」<sup>51</sup>。換言すれば、このプロセスは、閃きを生み出す「もと」であり、あらゆる理解可能な関係を暗に含んでいるという意味で、「閃きそのもの」である。

そこで、この閃きそのものと、閃きと、概念のうちに、三位一体なる神の、父と子のかたどりをみることができる。すなわち、唯一の神のうちに父と子が関係しているように、「無限の閃きそのもの」のうちに「無限の閃き」と「無限の概念」が関係している、と<sup>52</sup>。このように、アクィナスは、閃きから「内なることば」が生じるプロセス(emanatio intelligibilis)をもとに、三位一体のかたどりを創造的ベクトルの働きと類比させてとらえたのである。

アクィナスの見解を、内面の観点から解釈したのがロナーガンである。ロナーガンは、閃きが内面に生じる働きであることに着目し、これまで論じてきた内面分析という方法をとおして、「わたし」とは何かを教えてくれた。「わたし」とは、マインドと体のあらゆる要素を止揚する、生きている「わたし」そのもの、すなわち心である、と。この同じ一つの心には、創造的ベクトルだけでなく、癒すベクトルも働きかける。すなわち、神から注がれる「制約のない愛」、そこからほとぼしりである「信仰心」、その両者からほとぼしりである「行い」という、ことなる三つの要素が働きかける。それゆえ、わたしたちは、「われわれを先に愛した神を、すべてのものに先だって求め、愛し、あらゆる状況のうちにあつて、キリストとともに神において、かくれた生活を求めるように、努力しなければならない。世の救いと、教会の建設へと、その実りを結ぶ隣人愛は、ここからほとぼしりで、せまってくるのである」<sup>53</sup>。

このように、「制約のない愛」と「信仰」と「行い」が、同じ心に属していながら、互いにことなる三つの働きであることは、神にかたどって造られた「わたし」と三位一体との関係を、おぼろげながらも照らしてくれる。すなわち、「わたし」たち一人ひとりが、「制

約のない愛からほとばしりである信仰心、信じていることについての理解、その理解にもとづく実行という過程」をたどる癒すベクトルにしたがって、創造的な生活を送るなら、その生活によって作りだされる世界は、三位一体化されたものとなり、「わたし」とこの宇宙とを、三位一体化していくことになる、と。これこそ、神が創造されたこの宇宙全体の、グランド・デザインであると言えないだろうか<sup>54</sup>。

## ■ むすび 心における諸宗教との対話

むすびとして、心における諸宗教との対話について一言述べる。「人びとは種々の宗教から、昔も今も同じように、人の心を深くゆさぶる人間存在の秘められた謎に対する回答を期待している。その謎は、人間とは何か、人生の意義と目的は何か、善とは何か、罪とは何か、苦しみの起源と目的は何か、真の幸福を得るための道は何か、死後の審判と報いは何か、そして最後に、われわれの存在が依存し、われわれがそこから起こり、また、そこに向かっていく究極の名状しがたい神秘は何か、ということである」<sup>55</sup>。たとえば、仏教はこれらの謎に対する回答を見いだすためになされてきた努力の表れである。また、ユダヤ・キリスト教は、契約の神とイスラエルの民との関係を伝えようとして、長期的に、そうした人間の謎に光を投げかけることになったと言える。このように、個々の宗教は、「何百万人の信奉者の宗教的体験や期待を表わすもの」<sup>56</sup>として、「わたし」とは何か、「わたし」はどのように生き、また、死ぬべきか、ということについての独自の宗教的自己観を提供してくれているのである。

ロナーガンは、そうした独自の宗教的自己観の根拠を、人間の心の宗教的次元のうちに見いだすことによって、普遍的な宗教的自己観を示してくれた。すなわち、宗教者の本来性は無制約の愛に応えて生きる実存的自己超越のうちにある、と。個々の宗教は、そのようにして心の宗教的次元を生きる人びとの、宗教体験と悟りをもとに形成されてきたと言えるだろう。換言すると、究極的な実在とのつながりを生きる、心の宗教的次元こそが、あらゆる宗教体験、悟り、思想、教義、儀礼、伝統などのルーツであり、それらを生かし育む土壌なのである。

このような心の宗教的次元を、鈴木大拙は「靈性」とよんでいる。すなわち、「靈性とは、精神よりも高次元のものとして、精神の奥に潜在している働きであり、宗教的意識と言ってよい。この宗教的意識の覚醒は、靈性の覚醒であり、それはまた、精神それ自体が、その根源において働き始めたということの意味している。宗教的思想、宗教的儀礼、宗教的秩序、宗教的情念の表象などは、必ずしも宗教経験それ自体ではないが、靈性はこれ自体と関連しており、どこの民族にかぎられているのではない普遍性を有しているのである」<sup>57</sup>。

心の宗教的次元——心の究極的な次元・意識の第五の次元・無制約に愛してしまう状態——のうちに普遍的な宗教的自己観が見いだされたことによって、心の宗教的次元と関係している究極的な実在——われわれの存在が依存し、われわれがそこから起こり、また、そこに向かっていく究極の名状しがたい神秘<sup>58</sup>——を普遍的な観点から論じることができるようになったと言える。

たとえば、トマス・アクィナスの『神学大全』はどこに根拠づけられていると言えるだろうか。心の宗教的次元だろうか、それとも究極的な実在だろうか。トマス自身が述べているように、『神学大全』は、神学的には、究極的な実在に根拠づけられている。すなわち、「聖なる教においては、すべてのことがらが神を根拠として論じられる。すなわちそれが神そのものであること、あるいは、根源ないし目的としての神に秩序づけられていることを根拠として論じられる。それゆえ神こそは真の意味でこの学の主題であると言わなければならない」<sup>59</sup>。一方、宗教学的には、『神学大全』は心の宗教的な次元に根拠づけられていると言える。宗教学は、この世を超える究極的な実在を、この世における「人間の生活現象という角度からとらえようとする」<sup>60</sup>のである。

現代、「すべての人が神においていのちの充満を生きる」<sup>61</sup>ようになるために、諸宗教に対話が求められている。そこで言う対話とは、「真理を求め、自由を尊重し、互いを理解し、豊かにするために行われる、他宗教の信者個人や信者共同体との、あらゆる積極的で建設的な関係を意味する。それは二つのこと、すなわち、証しとそれぞれの宗教的確信の探求とを含んでいる」<sup>62</sup>。諸宗教が互いのうちに見いだされる「真実で尊いもの」を拒絶することなく、その「行動と生活の様式、戒律と教義を、まじめな尊敬の念をもって考察する」<sup>63</sup>ならば、「すべての人を照らす真理の光線を見いだす」<sup>64</sup>ことができるだろう。

諸宗教の対話を、心の宗教的次元に根拠づけるなら、対話のスタート・ラインを定めることが可能になる。それぞれの宗教者がもっている宗教的自己観は、人間の心の宗教的次元という普遍的な宗教的自己観に根拠づけられているからである。双方がこのスタート・ラインを自覚することによって初めて、「われわれの存在が依存し、われわれがそこから起こり、また、そこに向かっていく究極の名状しがたい神秘」について語り合い、「他宗教の信者個人や信者共同体とのあらゆる積極的で建設的な関係」を築いていくことができるだろう。

対話に開かれたキリスト者の心について、ロナーガンは次のように述べている。「聖霊によって、わたしたちの心に注がれた神の愛」<sup>65</sup>は、「神がすべての人にさしだしている恵みであり、あらゆる宗教のなかにある善いものを示し、福音をまだ耳にしたことのない人がどのように救われるかを説明してくれる恵みである。この恵みは、純朴な信徒が、たとえ信仰について誤って理解していたとしても、心のなかで天の父に祈りをささげることが可能にするであろう。最後に、自分ではそうと知らずに心のなかで神を愛しているかもしれない無神論者を含むキリスト者でない人びとと、すべてのキリスト

者とのカトリック的対話が成り立つという神学的正当性は、この恵みのなかに見いだされ得る」<sup>66</sup>。それゆえ、「われわれの心は、神を認め、固有の伝統のなかに高貴な宗教的、人間的要素を保っているすべての人に向かう」<sup>67</sup>。

#### ■ 参考文献

- Bernard Lonergan, *Insight*, University of Toronto Press, London, 1957, cf.pp.27-371.  
(同書を以下 *Insight* と記す)
- Bernard Lonergan, *Method in Theology*, University of Toronto Press, Toronto, 1971,  
cf.pp.101-241. (同書を以下 *Method* と記す)
- Robert, M. Doran, *Theology and the Dialectics of History*, University of Toronto Press, Canada,  
1990, cf.pp.3-294. (同書を以下 *TDH* と記す)
- E. Roig y Pascual, *Cartas de la Beata Rafaela Maria del Sagrado Corazon de Jesus*, ROMA, 1957,  
cf.p.193. (同書を以下 *Cartas* と記す)
- ペレス・バレラ『不思議の国の私』、ぎょうせい、2005年、325-465頁参照。  
(同書を以下『不思議の国』と記す)
- ペレス・バレラ『B. ロナーガンによる普遍的方法への門』、SJハウス、2008年、参照。  
(同書を以下『ロナーガンの門』と記す)
- ペレス・バレラ「信仰者の新しい姿を求めて—概論—」、参照。
- アウグスティヌス『告白』、「世界の名著 16」中央公論社、1994年、338-494頁参照。  
(同書を以下『告白』と記す)
- トマス・アキナス『神学大全』、「世界の名著 20」中央公論社、1993年、100頁。  
(同書を以下『神学大全』と記す)
- 渡部清「哲学的人間論」、13-15頁参照。
- 渡部清「他者認識の人間科学的基礎づけ」、上智大学『哲学科紀要』第1号、1975年、参照。
- 脇本平也『宗教学入門』、講談社学術文庫、2009年、参照。(同書を以下『宗教学入門』と記す)
- 鈴木大拙『日本の霊性』、岩波文庫、2007年、参照。
- 河合隼雄『無意識の構造』、中公新書、1998年、参照。
- 伊従信子『テレーズの約束』、サンパウロ、2003年、139頁参照。
- 多湖輝『頭の体操』、光文社文庫、1999年、35頁。
- 『新共同訳聖書』、日本聖書協会、1989年、参照。(同書を以下『聖書』と記す)
- 『広辞苑』、岩波書店、昭和56年、参照。
- 『対話と宣言』、教皇庁・諸宗教評議会・福音宣教省、参照。(同書を以下『対話と宣言』と記す)
- 第二バチカン公会議公文書——
- 「神の啓示に関する教義憲章」、参照。
- 「修道生活の刷新・順応に関する教令」、参照。
- 「キリスト以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言」、参照。
- 「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言」、参照。
- 「現代世界憲章」、参照。

#### ■ 脚注

- 1 河合隼雄『無意識の構造』、中公新書、1998年、25頁参照。
- 2 多湖輝『頭の体操』、光文社文庫、1999年、35頁。
- 3 以下を参照 *Insight*, pp.344-346.
- 4 『不思議の国』、326頁参照。
- 5 以下を参照 *TDH*, p.44.
- 6 『不思議の国』、325頁参照。
- 7 以下を参照 *Method*, p.241.
- 8 同上 p.344.
- 9 『ロナーガンの門』、131頁参照。
- 10 『広辞苑』、岩波書店、昭和56年、2165頁参照。
- 11 同上 1798頁参照。
- 12 同上 1979頁参照。
- 13 以下を参照 *Insight*, p.296.
- 14 同上、pp306-308.



- 
- 『ロナーガンの門』、144-148 頁参照。
- 15 以下を参照 *Insight*, pp.324-329.  
『ロナーガンの門』、149-150 頁参照。
- 16 渡部清「哲学的人間論」、13-15 頁参照。
- 17 同上 18 頁参照。  
渡部清「他者認識の人間科学的基礎づけ」、上智大学哲学科紀要 1 号、1975 年、参照。
- 18 以下を参照 *Method*, p105.
- 19 同上 p.103.
- 20 同上 pp.101-103.
- 21 『聖書』ヨハネの手紙 1、4 章 19 節。
- 22 同上 詩編、42 章 1 節参照。
- 23 『告白』、333 頁参照。
- 24 同上 337 頁参照。
- 25 「神の啓示に関する教義憲章」、2 番参照。
- 26 『聖書』ローマの信徒への手紙、5 章 5 節参照。
- 27 「神の啓示に関する教義憲章」、5 番参照。
- 28 同上 7 番。
- 29 『聖書』ローマの信徒への手紙、8 章 37-38 節参照。
- 30 伊従信子『テレーズの約束』、サンパウロ、139 頁参照。
- 31 『聖書』マタイによる福音、19 章 16-22 節参照。
- 32 以下を参照 *Method*, p.115.
- 33 同上。
- 34 同上。
- 35 同上 pp.115-116.
- 36 同上 p.118.
- 37 同上 p.119.
- 38 『不思議の国』、368 頁参照。
- 39 『広辞苑』、785 頁。
- 40 以下を参照 *Method*, p.115.
- 41 同上 p.241.
- 42 以下を参照 *Cartas*, p.193.
- 43 以下を参照 *Method*, p.241.
- 44 同上。
- 45 同上。
- 46 『聖書』創世記、1 章 27 節。
- 47 同上 ペトロの手紙 2、1 章 4 節。
- 48 『告白』、338 頁参照。
- 49 同上、494 頁参照。
- 50 『不思議の国』、454 頁参照。
- 51 同上 458 頁参照。
- 52 同上 451-465 頁参照。
- 53 「修道生活の刷新・順応に関する教令」、6 番参照。
- 54 ペレス・バレラ「信仰者の新しい姿を求めて一概論一」、参照。
- 55 「キリスト以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言」、1 番参照。
- 56 『対話と宣言』、16 頁参照。
- 57 鈴木大拙『日本的靈性』、岩波文庫、2007 年、17-20 頁参照。
- 58 「キリスト以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言」、1 番参照。
- 59 『神学大全』、100 頁。
- 60 『宗教学入門』、29 頁。
- 61 『対話と宣言』、26 頁参照。
- 62 同上 12 頁参照。
- 63 「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言」、2 番参照。
- 64 同上 2 番参照。
- 65 『聖書』ローマ人への手紙、5 章 5 節参照。
- 66 以下を参照 *Method*, p.278.
- 67 「現代世界憲章」、92 番。